

教員活動状況報告書

提出日：令和 4 年 3 月 1 日

所 属：生命・環境科学部 臨床検査技術 学科

氏 名：荻原 喜久美 職位：教授

I ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任（教育活動の範囲）

（教育活動について何をやっているのか：役職担当・主要担当科目リスト(必修，選択)（受講者数）（学部向け，大学院向け）（學理データ活用）

教師として何に責任を負っているかを明確にし，自分が担当している授業科目に関して数行で説明する。（分量の目安：2～5行（80字～200字）（科目表以外））

※分量（字数）はあくまで目安ですので，超えても構いません。内容を優先して下さい。（以下同じ）

1. 臨床検査技術学科 1 年次の基礎教養科学演習（生物学担当）および組織学において、身体の構造を理解に導く。2 年次からはじまる病理学、その他の関連科目についての礎を築いてもらうことを念頭においている。
2. 基礎を固めることにより一つずつ自ら進んで学習し、将来困難なことに遭遇した場合に自ら解決できる生き方を身につけられるよう対話しながら指導にあたるよう心掛けている。
3. 国家試験（200 題中 28 題）に 1 題でも多くの正解を導き出せる教育、疾患と検査の関連について理解できる知識を身につけるための講義を行う。

科目名	学科・専攻	必, 選, 自	配当年次	受講者数
基礎教養科学演習	臨床検査技術学科	必修	1 年次	99 名
組織学・同実習	臨床検査技術学科	必修	1 年次	104 名
病理学 I	臨床検査技術学科	必修	2 年次	94 名
病理学 II	臨床検査技術学科	必修	2 年次	93 名
病理検査学 I	臨床検査技術学科	必修	2 年次	93 名
病理検査学 II	臨床検査技術学科	選択	4 年次	93 名
病理学実習	臨床検査技術学科	必修	2 年次	93 名
病理検査学実習	臨床検査技術学科	必修	3 年次	90 名
総合臨床検査学 III	臨床検査技術学科	選択	4 年次	89 名
総合臨床検査学演習	臨床検査技術学科	選択	4 年次	89 名
卒業論文	臨床検査技術学科	選択	2, 3, 4 年次	28 名
病理学特論	環境保健学	選択	1 年次	1 名

科学者・研究者論	環境保健学研究科	必修	1年次	20名
----------	----------	----	-----	-----

2. 教育の理念（育てたい学生像，あり方，信念）

1. で説明した教育面での責任を基にしながら自分の教育理念に基づいて自分の教育アプローチについてまとめる。（自分の教育アプローチの説明：なぜやっているのか，自らの信念，価値，目指すもの）（分量の目安：8～12行（320字～480字））

病理学は、病気のメカニズムを解明する学問である。従って、単に疾患名を暗記するのではなく、どのようなメカニズムでその疾患が起き、体内ではどのような反応は起きているかを理解することが必要である。そのためには生体内にどのような細胞が存在し、活動しているかを分かりやすく説明し、学生さんに理解していただく。医学検査の分野は常に進歩しているため、私自身も周りにアンテナを張り巡らし、絶えず新しい知識を修得できるよう努力している。

現在入学してくる学生さんは以前と比較すると個性豊かであるため、一人一人の能力とニーズに合ったきめ細やかな対応を心掛けたい。研究室で行われている英語論文の講読をはじめとするプレゼンテーションの機会を与えることで、就職後も堂々と論理的に自分の考えを説明できる能力を培い、さらに卒業論文を通じて様々な場面に遭遇しても臨機応変に対応のできる臨床検査技師を育てることを目指している。

3. 教育の方法（理念を実現するための考え方，方法）

教育の目的と目標（これまでの教育経験においていつも行っていること。重要視していること。自分の教育を特徴づける方法）（分量の目安：15～24行（600字～960字））

臨床検査技師はどのように働き、社会においてどのように役に立っているかを低学年から機会があるごとに説明し、臨床検査技師になることへの定義付けを行っている。目的意識が明確でないと細かな知識の集積が困難になると考えているからである。卒業生と太いパイプを持ち、卒業生から提供される具体的な様々な体験談等を伝えることによって、在学生に自分の将来を少しでも思い描けるような教育を行っている。

講義については、講義ごとの最後にその日に行った内容について記述式の簡単な試験を行い、採点し、後日学生さんに返却している。フィードバックすることで自分の知識の再確認ができる。また、記述式の試験を行うことで、多くの知識の中で何が一番大切かを自分で記すことで理解につなげる。さらに記述式の試験を行うことで、集中して講義を視聴することができるという利点があると考えている。

組織学・同実習、病理学実習および病理検査学実習においては、各自、顕微鏡で標本を観察し、スケッチしている。全員のスケッチを最後の一人まで確認し、誤った場所をスケッチしている学生さんには確実に誤りを正している。また、準備が大変ではあるが、染色に関しては一人1枚ずつ未染色切片を手渡し、各自が染色した標本を観察している。また、実習冒頭に学生さんが観察する標本と同じスライドの写真を準備し、観察前にプレゼンテーショ

ンしている。そうすることにより、学生さんが目的のものを顕微鏡で探しやすくなり、効率が良い実習が可能となり、短時間での理解につながる。

アクティブラーニングについての取組

学生さんが実習中に各自で未染色標本を染色した場合、先に教員側で示した染色結果と同様な染まり方をしない場面が多々あり、そうした場合はなぜ示した通りの染色結果が得られなかったのかを各班、各自で考察していただき、その原因について班員で意見交換をしてもらっている。

ICTの教育への活用

講義・実習の開始前日に、講義スライド、講義ノート等を学理にアップしている。実習では全員が経験できない電子顕微鏡の標本作製および凍結切片の作製方法等の動画を作成し、学生さんに見ていただいている。

また、各自の携帯電話の写真撮影装置を用いて標本の顕微鏡像を撮影し、携帯電話の画面上で細かい細胞の名称について説明している。今年度は特にコロナ感染の問題があったため、お互いに直接同じ顕微鏡を覗かず携帯電話の画像を通して細胞名の確認ができたことは有意義であった。

4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）（分量の日安：15～24行（600字～960字））

現在の授業実践・教授手法をどのように改善していますか。

（①から⑤まで個別に記載又は①から⑤までまとめて記載ください）

① 教育（授業、実習）の創意工夫（B）

自分で撮影した写真を用い、標本とマッチしたわかりやすい写真を提示し説明している。また、教科書、参考書から典型的な組織像を選び、わかりやすく説明している。

② 学生の理解度の把握（A）

講義・実習を通してその都度学生さんに確認し、わからないときには再度説明するようにしている。マスクをしているので表情が読み取りにくいですが、学生さんの反応を見ながら講義・実習を進めている。小テストを行うことでどこが理解できていないかを把握している。

③ 学生の自学自習を促すための工夫（B）

低学年の学生さんにおいては、自学自習に自ら取り組んでいただくことが難しいと感じている。講義中のノートがきちんと書かれているか、また講義時に提示した課題が提出されているかについて内容を含め、きめ細やかに確認し、不足分があった場合は速やかに再提出を促す等、リアルタイムで行うことが理想であると思うが、現実には全てに対応することは時間的に難しい。

④ 学生とのコミュニケーション（質問への対応等）（A）

今年度は半数の学生さんで講義・実習ができたので、コミュニケーションが比較的とりやすかったが、実習は回数も少なく、集中実習でも A 班、B 班と間があくので質問等の対応も難しい一面があった。メールでの質問にはできる限り丁寧にわかりやすく答えたつもりである。

⑤双方向授業への工夫 (B)

双方向への工夫についても 100 人近い学生さんに各々対応することは難しいが、可能な限り迅速に対応している。また、授業評価の他に、学生さんとの日常会話の中で意見をきちんと聴いて妥当であると思う事柄については取り入れている。

今年度は、実習を半分の人数で行うことになり、その点では学生さん一人一人に例年よりはしっかり向き合えたと思う。しかし、実習は例年の半分以下であったため、限られた内容でのみの対応となった。

※B (実施しているが十分でない)

⑥国家試験対策としてどのような取組をしましたか。(V 学科, M 学科の教員の方のみ記載してください。)

4 年次前期に開講されている病理検査学Ⅱ(選択科目であるが、ほぼすべての学生さんが履修している)の講義の中で、過去 15 年間の病理分野の国家試験をすべて網羅し、細項目ごとに並べ、詳細な解説を行った。そうすることで学生さんは勿論であるが、私自身も国家試験対策としてどこまでを教えて、どこからは必要がないか再確認ができ、的確な講義が可能となった。

国家試験には写真問題が毎年、午前午後、数枚ずつ出題されるため、組織学の範囲で出される正常組織、病理組織標本および細胞診の写真を数 100 枚撮影し、その 1 枚 1 枚について標本の特徴を説明した。総合臨床検査学演習においては、模擬試験を含め試験問題について解き方の解説を行った。

また、国家試験対策委員長として、検討を重ね、令和元年度から他の先生方と協力して、4 年次後期から成績不良者の居残り学習を行い、出席確認等についても行った。昨年度および今年度は 1 月以降緊急事態宣言により最後まで徹底できなかったが、居残り学習をはじめたこの 4 年間の国家試験の合格率は 90% 台まで上昇している。

5. 学生授業評価 (分量の目安: 4~7 行 (160 字~280 字))

①授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。

「講義が早口でわかりにくい」と過去の授業評価で指摘されていたが、意識的にゆっくりと話すようにした。また、今年度は A、B 班での交互の対面講義であったため、さらにゆっくり講義している。

板書する文字がわかり難いという指摘があったが、今まで板書していたものをすべて

power point にした。講義のスピードがはやいという指摘には必要最低限を講義することで内容を減らした。

⑤ ①の結果はどうでしたか。

授業評価のポイントが高くなり、批判コメントもなくなった。また、板書していたものをすべて power point にした結果、文字がわかり難いという指摘は言うまでもなく無くなった。

③ ②を踏まえて次年度はどのように取組みますか。

次年度は同学年の学生さんが全員対面で行うことになる。わかりやすくゆっくりと講義をし、時間的にも 14 回となるので、さらにブラッシュアップして国家試験に出題される場所にポイントを絞り、講義していく。ただ、国家試験を意識し過ぎないように病理学の根本的なメカニズムについても詳細に説明し、病気が起きる理由も併せて講義していく予定である。昨年度と同じ様にイラストや写真、また自分で撮影した動画等をふんだんに用いてさらに分かりやすい講義を心掛けていく予定である。また、講義は全て録画し、学理にアップし、復習に役立てて頂きたい。

6.学生の学修成果（分量の目安：4～7行（160字～280字））

①学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。

（参考となる取組については、学内で共有させていただく予定です。）

毎回の講義において、記述式の問題を中心に講義中で最も大切な部分について小テストを行い、それを採点し、学生さんに返却する。また、正解についての解説を怠らない。学生さんの質問に真摯に向き合い、必ず相手が納得するまで説明する。

②教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価

国家試験後に学生さんが提出してくる問題の正解率において、どの程度の学生さんが得点できているかを確認している。勿論その年によって問題の難易度が変わるが、病理学、組織学、病理検査学関連は毎年正解率が高いことがうかがわれる。また、細胞診などの写真問題でも日頃の訓練の賜物で、ときに正解率 100% のこともある。

7. 指導力向上のための取組（FD 研究会参加状況）（分量の目安：1～2行（40字～80字））

FD 委員会にはできるだけ出席し、実習の準備等で視聴できなかったものは後日視聴した。「麻布大学の遠隔式授業に対する取組み」、「教育改善プログラム成果報告会」、「ティーチング・ポートフォリオ作成につながるティーチング・ポートフォリオ・チャートの作成ワークショップ」、「教育改善のための教員活動状況報告書を活用したティーチング・ポートフォリオの作成に向けて」等を視聴した。

8. 今後の目標（理念の実現に向かう今後のマイルストーン）

教育活動に関する今後の目標を記載してください。短期的な目標と長期的な目標を分けて記載してもかまいません。（分量の目安：3～6行（120字～240字））

1年次の前期に生物学に関連する身体の細胞の知識を深め、自分の身体について興味をもって2年次からはじまる病理学関連の講義について違和感なく入ることができるような教育を目標にしている。臨床検査技師国家試験全員受験、全員合格を目指したい。また、途中で大学に不登校になる学生さんについては何とか個人的にフォローし、留年はしても必ず卒業して頂きたいと切に思う。

卒業生とのパイプをもっと大きくし、臨床実習・就職等の情報を速やかに得ることができれば在校生の利に繋がるので、そのようなシステムを構築していきたい。

9. 添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ

※資料については非公開扱いのものもありますので、資料名のみを記載してください。
授業評価データ、授業に関するコメント、ティーチング・ポートフォリオ・チャート

●FD研修事後課題（ピアレビューによるブラッシュアップ）の実施

有・無

該当を○で囲む

●下線部以外は今回新規追加した事項を示す。

参考

※ ティーチング・ポートフォリオにおける自己記述を裏付けるエビデンス例

（「実践ティーチング・ポートフォリオ スタータブック」（大阪府立大学高専ティーチング・ポートフォリオ研究会 編）から引用）

（自ら作成するもの）

1. 授業に関するもの

シラバス、小テスト、宿題、レポート課題、試験問題、教材（配布資料、パワーポイント資料など）

2. 教育改善に関するもの

（教育に直接貢献する研究、FDプログラムなどへの参加記録、教育の工夫を示すもの（複数年のシラバス等）、教育活動関連の補助金の獲得

（他者から提供されるもの）

1. 学生から

授業評価データ, 授業に関するコメント (授業評価の自由記述やメールのやりとり等), 卒業生から授業や教育についてのコメント

2. 同僚から

授業参観の講評, 作成教材についての意見, 同僚のサポート実績

3. 大学/学会等から

教育に関する表彰, 教育手法等に関する講演の記録及び招聘の要請書類, カリキュラムやコースの設計などについての評価

(教育/学習の成果)

授業科目受講前と受講後の試験成績の変化, 学生の小論文・報告書, 学生のレポートの「優秀」「平均的」「平均以下」の例, 特に優秀な学生についての記録, 指導学生の学会発表などの成果, 学生の進路選択への影響についての事実, 学生のレポートの改善の軌跡